志向的内在

中村雅樹

はじめに

〈引用1〉

「すべての心的現象は，中世のスコラ学者たちが対象の志向的（または精神的）内在と呼んだところのものによって，またわれわれが，完全に曖昧でない表現というわけではないが，内容への関係，客体への方向（ここでは客体ということで実在性 Realität が理解されるべきではない），あるいは内在的対象性と呼ぶところのものによって特徴づけられる。すべての心的現象は，等しい在り方においてではないにせよ，あるものを客体としてみずからのうちに含んでいる。表象においてはあるものが表象され，判断においてはあるものが承認あるいは否認され，愛においては愛され，憎しみにおいては憎まれ，欲求においては欲求される，等々」（P. I. S. 124 f.）

「志向的内在（die intentionale Inexistenz）の概念は，ブレンターノの思想を理解するうえでの鍵となる重要概念であるが，それは同時にブレンターノの「志向性」に関する学説の誤解へと多くの論者を導いた躓きの石でもあった。その例としてわれわれは，ブレンターノの思想を英語圏に紹介し，英米の哲学の文脈から彼の思想を理解するうえで功績のあった，R. チザムによるブレンターノ解釈を挙げることができる。さらに一方においてそのチザムによる解釈を正面から批判し，他方においてクラウスらによる「伝統的解釈」を否定して「志向性」概念の新解釈を提出したと自負している L. マカリスターによる解釈を挙げることができよう。彼らは自らの立場にブレンターノの思想を引き付けて解釈しようとするあまり，結果としてブレンターノの真意を摑みそこねているように思われる。われわれ

以下において，おもにマカリスターのブレンターノ解釈を取り上げ検討していくことにしよう。論述の順序は，1．チザムによる「志向的内在」の解釈とマカリスターによる批判，2．マカリスターにおける「現実的存在」と「志向的存在」，3．客体の「実在性」についてのマカリスターの誤解，4．「内在的客体」は「思惟されたA」ではない，5．結論，となる。

1．チザムによる「志向的内在」の解釈とマカリスターによる批判

まずチザムは次ぎのように述べる。「『志向的内在』の概念をもっとも明らかに示しているのは，ときには心的態度と呼ばれる現象である。[中略] これらの態度は『自らのうちに志向的に客体を含む』とブレンターノが述べたとき，彼が言わんとしていたのは，たとえ心的態度がもっていると述べられうるような客体が実際には存在しなくても，それらの態度は『客体をもつ』と本当に述べられうるという事実である。ディオゲネスはたとえ賢人がまったく存在しなくても，賢人を探すことができた。[中略] しかし物的現象は，ブレンターノのテーゼによれば，『自らのうちに志向的に客体を含む』ことはできない。例えばディオゲネスにとって彼が樽の中に座るためには，座るべき樽が彼のためにそこに存在しなくてはならない」（C. 140.)。心的現象と物的現象の区別は，チザムによれば，心的現象は存在するかもしれないし，あるいは存在しないかもしれないような客体に関係しているのに対して，物的現象は存在せねばならない客対に関係しているという点にある（M. I. 153.)。しかしこの解釈がブレンターノの真意を伝えていないことは，マカリスターの指摘をまつまでもなく明らかである。チザムはここで「物的現象」としてわれわれの心的態度の外部に存在する「樽」を例として挙げている。すなわち彼にとって物的現象とは「精神」と区別され，「精神」の外部に存在する「物体」を意味している。ところがブレンターノが挙げているいくつかの例から明らかなように (P. I. 112.)，彼にとって物的現象とは「感覚質」であった。現象としてわれわれに現在しているかぎりにおける「感覚質」が物的現象なのである。

さてチザムの弟子でもあるマカリスターは，チザムによる心的現象の解

釈に対して疑問を投げかける。心的現象は存在する客体にも，存在しない客体にも関係するというチザムの解釈は，彼女によると，〈引用1〉における心的現象の客体に付けられた挿入文「ここで客体ということで実在性（Realität）が理解されるべきではない」の意味をチザムが取り違えたことによる（M. I. 153.)。すなわち彼は『志向的内在』（1957年）において「Realität」を「reality」と英訳することにより（C. 140.），この挿入文を心的現象は必ずしも存在する客体だけをとるのではなく，存在しない客体もとりうると理解したのである。しかし「Realität」は，ブレンターノにおいて個物である「実在物」「もの」を意味しており，この「実在物」の概念は「存在するもの」としての「reality」の概念と必ずしも重ならない。例えば，一角獣はたとえ存在しなくても（「reality」ではなくても），個物であり，それ故実在物，「Realität」である。こうしてマカリスターは次ぎのように言う。「この挿入された注が意味していることは単に，私の理解によれば，ちょうどものが心的現象の客体でありうるのと同様に，非もの，非実在物も心的現象の客体でありうるということである。この見解はブレンターノが『心理学』を書いたときには抱いていたが，しかしもののみが，すなわち実在物のみが心的現象の客体でありうるという見解のために，のちに拒否した見解である」（M. I. 154.)[1]。

多くのブレンターノ研究者は彼女によるチザム批判を妥当なものと認めるであろう。事実，彼女の解釈は，『経験的立場からの心理学Ⅱ』の序文の中のブレンターノの言葉とも整合しているように思われる。すなわち彼によれば，「もっとも重要な更新の一つは，心的関係は場合によれば実在物とは異なったものを客体にもつことができるという見解を，私はもはや抱いていないということである」（P.Ⅱ.2.)。さらにマカリスターのこのような「Realität」の解釈は，大筋において（客体を「思惟されたもの」とみなすか否かという点で，彼女との間に見解の相違はあるにしても）ブレンターノの弟子であったクラウスらの伝統的解釈とも一致する。クラウスは問題となっている挿入句に注をつけて，次のように述べているのである。「たとえ存在するにせよ，実在物（Realitat）（実在 Wesen, もの Ding）ではないようなものをも，それ故『非実在物』をも，われわれは客体にもちうるという見解を，ブレンダーノは後に明瞭に誤りとみなす」（P. I. 269. A. d.

H.)。

しかし彼女による解釈は，整理された理解しやすいものであるが，一筋縄ではいかないブレンターノの思想をプロクルステースのベッドに乗せてしまっている感が否めない。ブレンターノの「志向的内在」あるいは「内在的客体」について論じるときに，われわれは彼の後期における思想の展開を先取りしつつ，「何が客体となりうるのか」という視点から議論をしがちである。その結果，多くの研究者は，ブレンターノの前期の思想においては実在物も非実在物も客体となりうると考えられていたが，後期に至って，実在物のみが客体となりうるという周知の結論を引き出し，「内在的客体」概念の肝心な点はこれで尽くされたと考えている。「実在性（Realität)」を客体となりうるもの，すなわち「実在物」と同一視している（M. I. 154.）マカリスターの解釈もその一つの例であろう。「客体となりうるもの」に解釈の視点を置いている点では，彼女の解釈も，またチザムの解釈も，それどころかクラウスによる解釈も変りはないのである。

しかしブレンターノの前期の思想および前期から後期にかけての思想をつぶさに検討すれば，「内在的客体」ということで彼が主として論じているのは，「客体となりうるもの」についてではないことが明らかとなるであろう。ブレンターノはわれわれにとって現われている全世界を「心的現象」と「物的現象」の二大部類に分けたのであり（P. I. 109.），現われているかぎりにおける，あるいは広い意味においてわれわれによって経験されているかぎりにおける，このような現象の分析と解明こそが彼が自らに課した課題であった。「客体となりうるもの」が，表象されることによって「客体」として現われているという発想はここにはない。「何が客体となりうるのか」という視点に重きをおいて「内在的客体」について論じるのは，（マカリスターにおいてもそうであるように）ブレンターノの思想に不当な単純化と歪曲をもたらすと思われる。

2．マカリスターにおける「現実的存在」と「志向的存在」

さてクラウスやヘフラーらの伝統的解釈に対して，マカリスターが「志向的内在」概念の新しい解釈であると自負しているのは，次のような見解

である。

〈引用2〉

「心的現象は，その客体が現実的存在（actual existence）と志向的存在（intentional existence）の双方をもっていようと，あるいは志向的存在のみをもっていようと，客体に関係しているような作用である。心的現象は，いかなる現実的存在をももっていない客体にある種の存在を授けるような作用であるか，あるいはすでに現実に存在している客体に存在の第二の様態を付け加えるような作用であるかのいずれかである」（M. Ⅱ. 28.）。

彼女がここで用いている「現実的存在」と「志向的存在」は，「客体がもちうる存在の二つの異なった様態」（M. Ⅱ. 25.）である。「現実的存在」をもっている「馬」は，表象されることによって新たに「私のこころにおけるある種の存在」（M. Ⅱ. 26.）すなわち「志向的存在」を獲得するのである。これに対してわれわれが「一角獣」を表象するときには，「内在的客体」である「一角獣」は，「現実性の欠如ではあるが，無ではない」（M. Ⅱ. 26.）のような「志向的存在」しかもたないのである。彼女が「志向的存在」という概念を提出するには理由がある。それは，クラウスやヘフラーからチザムに至るまでの多くの研究者を誤らせている，「内在的客体」は「馬」ではなく，「思惟された馬（馬についての思惟）」であるとする伝統的解釈を否定せんがためである。「現実的存在」をもたない一角獣を表象するとき，表象の客体が「一角獣についての思惟」（チザム）ではなく，その客体が「一角獣」であるために「一角獣」は何らかの意味における存在をもたねばならないからである。

さてわれわれは彼女が「現実的存在」と「志向的存在」に与えた意味が，ブレンターノがそれらの語に与えた意味とまったく異なっていることに注意しなければならない。ブレンターノにとって厳密な意味での「現象」とは，『経験的立場からの心理学』以来，心的現象のことであり，物的現象あるいは外界（Aussenwelt）の現象のことではなかった（D. 129.）。心的現象は内部意識において知覚され，それ故心的現象の「現実的存在」は直接的明証性とともに把握された（P. I. 128.）。これに対して，外部知覚の現象

は，われわれがそれを表象するときわれわれに対して志向的かつ現象的に現われてはいるが，「間接的な根拠づけの方法においてもけっして真かつ現実的として証明されない」(P. I. 128.)。また「心的現象はそれにのみ志向的存在の他に現実的存在も帰属するような現象である」(P. I. 129.)。これに対して，物的現象である「色，音，暖かさは単に現象的かつ志向的にのみ存在する」(P. I. 129.)。これらのブレンターノの言葉から明らかなように，心的現象であれ，物的現象であれ，それがわれわれに現われているかぎり，現象的かつ志向的存在をもつ。したがって言うまでもなく，「志向的存在」は心的現象を物的現象から区別する心的現象に固有の性質ではない。「志向的存在」を，心的現象のみがもつとされる客体の「志向的内在」と混同してはならないのである。まとめると次のようになる。

心的現象……現実的・志向的存在と現実的存在をもつ
物的現象……現象的・志向的存在のみをもつ

「心的現象」の「志向的存在」と「現実的存在」は，まさに「心的現象」のそれであって，「心的現象」の客体，あるいは客体となりうるものについて述べられているのではない。この点においてブレンターノによるそれらの語の使用は，「心的現象は，その客体が現実的存在と志向的存在の双方をもっていようと，あるいは志向的存在のみをもっていようと，客体に関係しているような作用である。」(M. II. 28.)，と述べるマカリスターによる使用とは異なっている。もっとも彼女も，心的現象と物的現象とを区別するような「志向的存在」以外の特性を論じる文脈において，「志向的存在」と「現実的存在」のわれわれが述べたような概念使用について語ってはいる。(M. II. 29f.) しかし，彼女はその概念を心的現象の客体へと転用することについての説明を一切おこなうことなく，もっぱら「内在的客体」の「志向的存在」と「現実的存在」とを問題にしているのである。

3．客体の「実在性」についてのマカリスターの誤解

われわれは先に〈引用1〉の挿入文「ここでは客体ということで実在性が理解されるべきではない」に対するチザムの解釈と，マカリスターによ

る批判について述べた。結局，彼らにおいて「実在性」とは，「実在性」をもった「客体となりうるもの」，あるいは「実在物」「もの」に他ならなかった。われわれはここでこのような解釈が誤っていることを論証することにしよう。

〈引用1〉の「志向的（または精神的）」に付けられたブレンターノによる注によると（P. I. S. 124.），「対象の志向的内在」によって，精神の外における現実的存在（wirkliche Existenz）が意味されてはいない。また彼は別の注において，フィロンは「精神的存在」および「内在」を本来的意味における存在と混同することにより，矛盾に満ちたロゴス論およびイデア論に陥ったと，フィロンを批判している（P. I. S. 125.）。ブレンターノは「精神的存在」「内在」を「本来的意味における存在」と混同してはならないと考えていたからである。さらに『心理学Ⅱ』にブレンターノが付けた注（P. Ⅱ. S. 8.）を見てみよう。そこでは「客体的」とは、「現実的存在者」ではなく，「意識のうちに現在していること」，あるいはいかなる現実性もそれに対応していないような「単に主観的な現象」を意味している。すでに明らかであろう。ブレンターノの「志向的内在」あるいは「内在的客体」は，「精神の外の現実的存在」や「本性的意味における存在」と区別される「精神的存在」であり，「単に主観的な現象」として「意識のうちに現在している」客体に他ならない。すなわち彼の言う「内在的客体」とは，「意識のうちに現在している」かぎりにおける客体である。このような意味のおいて，「ここで客体ということで実在性が理解されるべきではない」のである。

それ故，「実在性」をもたない「客体」は，実在的にまた現実的に存在している心的現象の部分を構成しているような実在物ではない。「客体」は作用のうちに「内在」してはいるが，しかしその作用と同様の「実在性」また「現実的存在」をもっているのではなく，その作用とはまったく異なった「志向的内在」という在り方をしている。例えば「音」を聞く作用は「本来的意味において知覚され」，また「現実的存在」をもっているが，これに対して「音」は「内在的対象を形成するもの」として聞く作用において現象するが，しかし聞く作用自身からは異なっている（P. I. 172f.）。しかもこのことは，「音」が聞く作用を離れて現実に存在する，あるいはマカリス

ターの言う「現実的存在」をもつということをけっして含意していない。「聞く作用に聴覚によって知覚可能な客体としての音が対立しているのではけっしてない」(P. I. 173.) のである。聞く作用の内容（客体）は「現実的対象」として理解されてはならず，聞く作用以外の何ものも「実在的(real)」として示されなかったのである (P. I. 173.)。このような意味において「内在的客体」である「音」は物的現象として「志向的存在」をもっている。

こうして「客体」という語において「実在性」が理解されているのではないという言葉は，「客体」はそれが「客体」であるかぎり志向的に内在しており，それ故客体は「志向的存在」しかもたないという意味において理解されるべきであろう。より厳密に言えば，一方において「客体」は心的現象に「内在」しつつ，しかもその「実在的」部分を構成しないという意味で「志向的存在」しかもたず，他方において「客体」は「客体」であるかぎり心的現象の外部に「実在的」に存在しているのではないという意味において，「志向的存在」しかもたないのである[(2)]。

「志向的存在」あるいは「内在的客体」について，このように理解するのがもっとも妥当であると思われる。注意すべきは，ブレンターノはここにおいて「何が客体となりうるか」ということについては何も述べていないということである。すなわち，客体となるものが実在物であっても，非実在物であっても，「客体ということで実在性は理解されるべきではない」。この意味においてこそ，「内在的客体」であるためには，その客体は精神外に存在する必要もない。これを明瞭に示しているのは，マカリスターによってまったく別様に解釈されている，1905年にマルティに宛てたブレンターノの書簡である。

〈引用3〉

「[前略] 内在的客体＝『表象された客体』であるというのは私の見解ではありません。表象は『表象されたもの』ではなく，『もの』を客体にもちます。それ故，例えば，馬の表象は『表象された馬』ではなく，『馬』を（内在的な，すなわちそれのみが本来的に客体と呼ばれるべき）客体にもちます。

しかしこの客体は存在しません。表象するものは，何かを客体にもちますが，だからと言ってその何かが存在するということはありません」(W. 87f.)。

この引用文中の「しかしこの客体は存在しません（Dieses Object ist aber nicht）は，マカリスターによって「しかしこの客体は存在する必要はありません（But the object need not exist)」と英訳され（M. II. 23.），〈引用3〉は次のように解釈されている。「こうしてブレンターノが述べるには，超越的客体（もしそれが存在するばのことだが）から異なっているような実体であるということがその客体に含まれているということを，彼は「内在的」という語によって意味しているのではけっしてない。彼が意味していたのはただ，客体は志向的作用の客体であるために現実に存在する必要はないことを指摘することであった。志向的存在で十分である」(M. II. 23.)。われわれによれば，彼女の英訳は明白な誤訳であり，したがってそれに基づく解釈も誤っている。

ブレンターノはこの〈引用3〉の前半において，われわれは「もの」である「馬」を「内在的客体」としてもつのだ，と述べている。しかし後半部において，「この客体は存在しません」と述べる。これは明らかに，「馬」である「この客体」は存在しないという意味である。すなわち馬の表象は「馬」を内在的客体にもつのであるが，だからといってその客体は存在するのではない。われわれは客体が「一角獣」ではなく「馬」である場合でも，「その客体は存在しない」と理解しなくてはならない。事実われわれは「実在性」をめぐる議論を通して，「客体」が「志向的存在」しかもたないことを論じてきたのである。ところがマカリスターは「馬」は，「現実的存在」をもっていると考えているのであるから，「その客体が存在しない」というのは彼女には理解しがたいことである。そこで彼女は「その客体」とは「馬」のことではなくて，「客体一般」を意味していると解釈し，「一角獣」などの例から明かなように，「この客体は必要はありません」と英訳したのであろう。

「意識のうちに現在している」かぎりにおける「馬」，それ故「実在性」をもたず，その意味において「存在していない」ような「馬」が，ブレン

ターノの言う「内在的客体」であった。マカリスターも「馬」こそが「内在的客体」であることを，1905年のマルティ宛ての書簡を引用しつつ強調している。しかし彼女が述べていないのは，「馬」はどのような意味で「内在的」客体なのかという点である。彼女は，精神の外に「現実的存在」をもっている「馬」（超越的存在をもつ「馬」）が，同時に「内在的客体」である，ということを十分説得的に説明していない。それどころか彼女によれば，「内在的」客体ということでもって，「超越的」客体から異なった客体が考えられているのではなかった(M. Ⅱ. 23)。ここでは「客体」という語そのものがすでに「内在的」という意味をもっているのだというブレンターノの考えは何の答えにもならないであろう。彼女にとっては「馬」が「超越的」か「内在的」かという議論はそもそもどうでもよい議論であった。マカリスターの議論がブレンターノの志向的に内在している「内在的客体」概念と擦れ違っている理由の1つはここにある[3]。

4.「内在的客体」は「思惟された客体」ではない

マカリスターは「内在的客体」＝「思惟された客体」であるという解釈を「奇妙な見解」とみなした。「それによると，われわれは自分の心的内容をただ愛し，欲し，思惟し，判断等々できるのみであり，これらの心的内容が対応している心の外にある何かについては，けっしてそのようにはできないのである」(M. Ⅱ. 22.)。しかしわれわれは彼女による「内在的客体」の解釈を否定する以上，われわれは彼女のこの説明を受け入れるわけにはいかない。われわれが「馬」を表象するとき，その「馬」は自分の心的内容である「馬」であって，心の外部に存在する「馬」ではないからである。しかしたとえ彼女による「内在的客体」の解釈が誤っているにせよ，「内在的客体」＝「思惟された客体」であるというのが自分の見解であったことはないというブレンターノの抗議を，その通りに受け入れようとする彼女の姿勢そのものまでも否定することはできないであろう。われわれは以下において，「内在的客体」は「思惟された客体」ではないというブレンターノの主張を改めて確認したい。

ブレンターノは「音」を聞く作用について考察する際に生じる，二つの

誤謬について述べている（P. I. 173.）。第一の誤謬は，聞く作用の客体（内容）を素朴に「現実的存在」とみなす誤謬である。第二の誤謬は聞く作用をまさに現実的存在をもつこの聞く作用自身に向けられているとみなす誤謬である。この第二の誤謬から聞く作用は「音」に向けられているのではなく，「音を聞いていること」あるいは「聞かれている音」に向けられているという新たな誤謬が生まれる。ブレンターノはこの二つの誤謬を指摘しつつ、聞く作用は「音」を聞くのであって「聞かれた音」を聞くのではないと主張したのである。これが「内在的客体」＝「思惟された客体」ではないという見解の要点であろう。ただ言うまでもないことではあるが，ブレンターノが「客体」＝「思惟された客体」ではないと主張したからといって，「客体」が「現実的存在」をもちうるという論点は，ブレンターノの論旨からはけっして生じないものである。

ところで内在的客体を「思惟された A」とみなし，1905 年の書簡の内容に疑問を抱く人にとって有利な証拠と考えられうるのは，ブレンターノの次ぎのような言葉であった(4)。

〈引用 5〉

「思惟された A が存在することなしに，A 思惟することが存在するというのは不可能であり，またその逆も同様に不可能である。二つの概念は同一（identisch）ではなく，相関的（korrelativ）である。[中略] しかし一方の概念のみが作用を被り，作用を及ぼす本体的なもの（ein Wesenhaftes）の概念であり，他方の概念は，その本体的なものが作用を被ることによってのみ，それに随伴する存在者としてともに生じ，その本体的なものが消滅するまで存続するようなあるものについての概念である」（W. 31.）。

これに対してマカリスターはブレンターノの「志向的関係」についての学説を引き合いに出すことにより，「内在的客体」が「A」であって「思惟された A」ではないことを論証しようとする。彼女によれば，「思惟された A」を内在的客体とみなす人は，「志向的関係」ということで xR（思惟された A），あるいは xR（A についての思惟）という関係を考えているが，これは誤りである。たとえ A が「現実的存在」をもっていなくても，それ

が思惟されているかぎりは「志向的存在」をもっているのであり，したがってxRAは「真正なる関係」だからである（M. Ⅱ. 27f.)。しかしマカリスターはxRAという志向的関係が,「思惟されたAの存在」と「Aを思惟することの存在」との間の「相関的関係」と異なることに気づいてはいるが（M. Ⅱ. 24.)，必ずしもその点に関して明確に述べているわけではない。そのために彼女の論述に対して，一方において相関的関係を認めておきながら，他方において「思惟されたA」を客体とみなさないのは矛盾ではないかと，クラウスの立場から反論が生じかねない。しかし以下において述べられるように，このような反論の誤っていることは〈引用5〉が述べられている文脈から明らかである。

『真なるものの意味における存在者』(1902年以後に書かれたものではない）において，ブレンターノは「思惟されたA」の概念は「実在物」であるような「本体的なもの（das Wesenhafte)」の概念ではないが,「真なるもの意味における存在者」として存在すると述べる。しかしこの「思惟されたA」の概念を，同様にこの世に存在しない「木製のアイロン」や「黄金の山」の概念と同じものと考えてはいけない。「木製のアイロン」の概念は,「木製のもの」と「アイロン」という「本体的なもの」の概念に対応している。これに対して「思惟されたA」（例えば「思惟された馬」は,「本体的なもの」(「馬」および「思惟するもの」）に対応しているのではない。すなわち「思惟されたA」の概念は,「木製のアイロン」の概念とは異なり,「本体的なもの」である「A」の概念と，同様に「本体的なもの」である「思惟するもの」の概念から合成されたのではない。そうではなくて,「思惟されたA」の概念は「Aは思惟するもの」の概念と，相互に相手なくしては存在しえない関係にある。しかも〈引用5〉に述べられているように,「Aを思惟するもの」のみが「本格的なもの」であり,「思惟されたA」はこの「本体的なもの」の随伴的存在者として「本体的なもの」とともに生じ消滅する。それ故，ここで問題となっているのは,「非本体的なもの」の存在性格である。作用とその客体との間の「志向的関係」が問題とされているのではけっしてない。「思惟されたA」は「Aを思惟するもの」の「言葉上の相関項」(W. 177. A. d. H.）であって客体ではなく，まさに「A」が「Aを思惟するもの」の客体なのである。

5. 結　論

われわれはマカリスターのブレンターノ解釈を批判することによって，「志向的内在」の概念を明らかにしてきた。その結論は単純である。ブレンターノ前期の思想によれば，われわれは「思惟された馬」ではなく，「馬」を「内在的客体」にもっている。ただしこの「馬」は「現実的存在」をもった馬でも，「実在性」をもった「馬」でも，さらに「実在物」としての馬でもなく，われわれに現象として現在しているかぎりにおける「馬」であった。マカリスターによる解釈は，「客体となりうるもの」である「実在物」あるいは「もの」に関するブレンターノの後期の思想をもちいて，彼の前期思想を不当にも歪めてしまったのである。

引 用 文 献

以下の著作から引用する場合は，該当の著作を略号で表し，そのあとにページ数を記す。引用文中のカッコ［　］は筆者によるものである。

(1) F. Brentano, Psychologie vom empirischen Standpunkt, Bd. I, Nachdruck 1971　この著作からの引用は P. I. と略す。

(2) F. Brentano, Psychologie vom empirischen Standpunkt, Bd. II, Nachdruck 1971　P. II. と略す。

(3) F. Brentano, Wahrheit und Evidenz, Neudruck 1962　W. と略す。

(4) F. BrenTano, Deskriptve Psychologie, 1982　D. と略す。

(5) R. Chisholm, Intentional Inexistence, in: The Philosophy of Brentano, ed. L. McAlister, 1977　C. と略す。なおチザムのこの論文は，彼の著作『知覚(Perceiving)』(1958年）の第11節に相当する。

(6) L. McAlister, Chiholm and Brentano on Intentionality, in: The Philosophy of Brentano, ed. L. McAlister,1977　M. I. と略す。

(7) L. McAlister, The Development of Franz Brentano's Ethics, 1982　M. II. と略す。

注

(1) マカリスターらは『経験的立場からの心理学』の英訳において，「Realität」を「もの（thing)」と翻訳している（Psychology from an Empirical Stand-

point, ed., L. McAlister 1973, p. 88.)。なお彼女が「もの（thing）と翻訳したのは，チザムらによる英訳版『心理と明証性』の彼による序文に従ったからである（M. Ⅱ. 21.)。

(2) マカリスターの解釈を基本的に踏襲する村若修は『志向的対象とは何か』(『倫理学研究』(広島大学倫理学研究会)，第3号，1990年）において，この挿入文を次のように解釈している。「ブレンターノの弟子たちはこの部分［＝挿入文］を『内在的対象すべて非実在的である』と読んだに違いない。しかし，マカリスターとわれわれの立場ではそう読むわけにはいかない。なぜなら，『内在的対象』はすべての対象を含む概念であり，その中にはもちろん実在的な『個体』が含まれるからである。そこでわれわれはこの箇所を『対象がすべて実在的であるわけではない』と部分否定的に読むことにする」(p. 45.)。部分否定として読むことを提唱する村若は，マカリスター以上に明解かつ率直であるが，われわれによればこの村若の解釈も誤りであろう。

(3) 村若によると，マイヤー＝ヒレブラントらの伝統的解釈は，誰かが「A」を表象する場合，その対象としていわゆる外的対象「A」と志向的対象「表象されるA」を考えている（上掲書，P. 40.)。すなわち，ブレンターノの前期思想において「A」,「表象されるA」,「Aを表象するもの（人）」の三項が必要とされる（上掲書，p. 46.)。これはクラウスによれば「ブレンターノの旧い講義にしたがった」区分であって，「表象作用自身において遂行されうるようないかなる現象認識学的（いかなる現象学的）区分でもない（W. 191.)。われわれの論述から明らかなように，ブレンターノの前記思想は，三項の存在を説いているのではなく，むしろ「Aを表象するもの」と内在的客体である「A」の二項関係を，「表象自身において遂行されうるもの」としてもっぱら分析しているのである。

(4) クラウスは注において次のように述べる。「それ故ここにおいてはっきりと，それぞれの思惟作用に思惟されたもものが相関項（Korrelat）として対応していると述べられた。ブレンターノは，われわれは表象された馬ではなく，馬を表象すると強調したが，彼はそれにもかかわらず馬を表象するものと表象された馬との間の相関関係（Korrelation）を説いていたのである。私がこのことに注目するのは，あとに［『真理と明証性』の87ページ以下に］印刷されている1905年3月17日付けの書簡において，このような見解を以前抱いていたことが彼には疑わしく思われるほど，この見解は彼にとって遠いものになったからである。彼にとって『思惟されたA』は後には『Aを思惟するもの』に対する言語的相関項でしかなく，思惟的な相関項ではない」(W. 177.)。「それにもかかわらず」という言い方から窺うことができるように，クラウスにとって，「表象された馬」ではなく「馬」を客体にもつということと，両者間の「相関関係」とは矛盾するように思われたのであろう。このクラウスによる注によって，「思惟されたA」が内在的客体であるかのような混乱がブレンターノ解釈にもたらされたのである。